

## ■ 律法の三用法

今日の聖書箇所である「放蕩息子」の記事は、次のように3つの用法に分けることができます。

### ■ 第一用法「断罪用法」

文字のごとく「罪を断つ」用法。つまり聖書によって私たちは罪を知ることになります。

『なぜなら、人はだれも、律法を行うことによって神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。』（ロマ3:20）

### ■ 第二用法「養育用法」

罪を知った存在をイエスに導く用法。

私達は律法を守ることができません。しかしイエスを信じる信仰によって義とされるのです。

『こうして、律法は私達をキリストに導く養育係（家庭教師という表現もできる）となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです。』（ガラ3:24）

### ■ 第三用法「規範律法」

イエスと出会い救われたキリスト者の規範。

罪を知り、赦された私達は、神を愛したいと思うようになります。私達はどのように、神を愛したら良いのでしょうか？

『神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。』（Iヨハ5:3）

## ■ 二人の息子

### 1) 我に返った弟息子

・自由を求めた弟息子は、父親から財産の分け前を受け取ると、遠く異教の地へと旅立った。

→知らない土地で自分を試して見たかったかもしれない…

→知らない土地でもある程度やっていけると誤解する…

・そして、放蕩し、湯水のように財産を使い果たしてしまっただ。

→冷静に見れば馬鹿なことだが一度はやってみたい野心…

・そこに大飢饉が追い打ちをかけ、食べるにも困り果てるようになった。

・やっとの事で迎え入れてくれた人がいたかと思えば、ユダヤ人が忌み嫌う豚の世話を命じられる始末。

・弟息子は豚の食べるイナゴ豆で空腹を満たしたいほどに追い込まれた。

→究極の屈辱

・その時、弟息子は我に返った。

→どうしてここまでの屈辱を受けてまでこの土地にいないとダメなのか

→父の土地に戻れば食べ物に困らないではないか

・弟息子は『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。』

(18節)と悔い改めた。

・我に返るとは、自分が何かを知ることであり、自分が何処にいるかを認めること

(居場所・現実を理解する)である。

→アダムとイヴは現実を認めることが出来なかった。その結果、「この女が…この蛇が更には神様にまで不満をぶつける」

自分の罪を認めず、責任転嫁し、人や神に不満をぶつけることは罪の象徴です。

### 2) 怒った兄息子

・畑仕事を終えて家に帰った兄息子を待っていたのは、放蕩した弟息子の祝宴だった。

・祝宴のことをしもべから聞かされた兄息子は、怒って家に入ろうともしなかった。

・兄息子が怒った理由は『長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。』

それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふるせなざったのですか。』(29~30節)と言う不平不満であった。

→兄息子は父に対して自分の気持ちをぶつけた

・よく考えると、父親の財産は既に二人の息子に分けられた。弟息子が

『私の財産の分け前をください』と求めたときに、父親は『身代をふたりに分けてやった。』(12節)と聖書は記していた。

・それでも兄息子が怒るのは無理もない。

## ■ 喜びを共に (神様の目線)

### 1) 遠くから見つけた父親

・我に返り「天と父親」とに悔い改めた弟息子を待ち受けていたのは、遠くまで捜し続けていた父親だった。

・遠い道のりの先に、変わり果てた弟息子を発見した父親は、自ら走り寄り、抱きつき、口づけを交わした。

・家に連れ帰ると「よい着物を着せ、指輪をはめ、靴を履かせ、肥えた小牛をほふって」くれた。汚れたまま、家に迎えました。(綺麗にしてからではない)

・父親にとって息子は息子。しかも「死んだと思っていた息子が生きて帰ってきた」のだから、これほど嬉しいことはない。

・父親は『この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』(24節)と祝宴を始めた。

### 2) 共に祝う喜び

・兄息子が怒っていることを知った父親は『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』(31節)と、家から出てきて兄息子をなだめた。

→兄息子にはその自覚は感じられず悲劇のヒロインのようである

・父親は兄息子の怒りが分かっていた。兄息子がいつも我慢していたことを父親は知っていた。

・我慢していた息子が自分の気持ちを素直にぶつけてくれたことは、父親としては嬉しい。

・友だちが来たときに、ご馳走してほしければ(我慢しないで)「お父さん友だちが来たので子山羊を一匹ほふってください」と頼めばよかった(言えばよかった)のである。

→本当の気持ちを言えなかった。

・兄息子は我慢することが親孝行であり、親の言いなりになることがよい子どもだと思っていたと思われる。(嫌われたくない!!)

→本当の気持ちを伝えることも大切なことである。

・兄息子は、父親と共にいながら父親の気持ちが分からなかった。

・放蕩した弟息子は、我に返ると「父の家」を思い出した。一方、兄息子は父親と一緒にいながら父親を思い出せなかった。

・神が私たちの存在を喜び祝いたくても、そこには素直に喜べない私たちが居ることを改めて知らされる。

## まとめ

神様は私達と喜びを共有したいと思っておられます。ただ神様だけが喜ぶのではなく、その喜びを私たち一人ひとりと共有したいのです。そしてイエスキリストに命がけで救われた私達は、そんなイエス様の愛に応えたいと思うようになります。律法が守れない私達が、イエス様の愛に応える為に、もう一度、守れない律法を守ろうとするところに戻ってきます。つまり、守るか・守れないかが大切なのではなく「守ろうとする心」が大切なのです。『神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。』(Iヨハネ5:3)

『わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。』(マタイ11:30)

私達はイエス様を負うのではなく、イエス様が私達を負って下さっている(フットプリント)のです。

今日「我に返りましょう」自分が何かを知り、どこにいるのか？現実を素直に認めましょう。神様は放蕩息子の父親のように、主のもとに帰ってきた私達を汚れたまま受け入れて下さり、また兄息子に語ったように「いつも共にいる。わたしのものは、あなたのものだ。」と語りかけて下さります。主の喜びを、共に喜ぶ者でありますように。

(要約者:泉水浩)